

校友会報

第 2 1 号

昭和 47 年 7 月 20 日

日 本 大 学 工 学 部 校 友 会

福島県郡山市田村町徳定字中河原一

電 話 郡山 44-1327

振替口座 郡山1990

郵便番号 979-66

発行人 佐藤光正

編集人 平手 仁



工 学 部 正 門

御 挨 拶

日本大学工学部長 野 引 勇



工学部は本年4月、20回目の卒業生を送り出したのでございますが、校友会におかれましても新会員を迎え益々御発展のこととお喜びいたします。また校友の皆様方もそれぞれの職場において御活躍のことと存じます。さて、この機会に工学部の近況をお伝え

致したいと思います。

まず第1は本年4月から、大学院博士課程が設置されたことです。昭和45年に大学院工学研究科修士課程が設置されて以来準備を進めて参りましたが、この3月、土木工学、建築学、機械工学、電気工学、工業化学と5専攻共認可され、これで学部とあわせて修士課程、博士課程と全部そろったこととなります。ちなみに東北、北海道を含めて私立大学に工学研究科博士課程が設置されたのは初めてのことであり、また、5専攻全部がそろって認可されたのも珍しいことであります。これによってこの学部で工学博士の学位を授与することができるようになり、学部の発展と相まって名実共に充実した学園が誕生したのであります。

第2は教育内容の充実ということです。今年は10余名の新任者を迎え、専任教員だけで約160名を数えるに至りました。また、教室も実験設備も整い、恵まれた自然環境の中で全人的な教育を目標に努力しております。即ち日進月歩する技術革新に対応できる専門知識と広い視野のもとに、時流に迷わされることのない判断力とそれを実行するための強い意志をもった有能な工学技術者を養成することです。そのためには単なる教室での授業ばかりでなく、実験実習や卒業研究、クラブ活動その他の教職員と学生との接触が人間形成に大いに役立っていると考えます。研究の面においてもそれぞれの分野で学会や学術雑誌に数多くの成果が発表されており、春には、工学部紀要第13巻を刊行致しました。また、毎年10名前後の教員が国際学会での発表または短期、長期の研究のため海外に派遣されております。外国からの客員教授としては、理工系3学部で1名、秋に招へいすることになって居り、また大学院特別講義のため国内の権威者数名を招く予定になっております。

第3は学生生活についてです。厚生施設も年を追っ

て充実しておりますが、今年は厚生センターに待望の軽食喫茶室と理髪店が開業しております。学生のクラブ活動も盛んで、現在、学部直属部5、体育部24、学術文化部13、同好会22、合計64団体に約2,500名の学生が加入しております。大学としても教育活動の一環として位置づけ、学生の自主性を尊重しつつ、指導教職員の協力のもと積極的に指導助言しております。また校友会からは、父兄会と共に多額の助成をいただいていることをここに感謝します。おかげをもちまして各クラブ共活発な活動を行っており、それぞれ優れた成果を挙げております。今年6月の東北地区総合体育大会においても、ラグビーが優勝したのを始め準優勝2を含め昨年に勝る成績でした。これら部活動の施設として昨年秋には恐らく大学としては初めての設備を備えた武道館が完成致しましたが、本年は7月に50m、9コースのプールが完成し、また、長年待ち望まれていた部室棟も現在建設中であります。また今年は初めての試みとして主として3、4年生を中心とした欧州研修旅行を行なうことにしました。学生約100名に教員4名、医師1名を加え7月24日に羽田を立ち約1ヶ月の予定で欧州各国の大学、工場その他を視察して参ります。海外を旅行することによって、外国の人達に直接接すると共に、改めて日本を見直す機会もあると考えます。もう一つ、ここで触れておきたいことは昨年9月駐車場ができたのを機に学内の交通規制を行なったことです。以来約1年になりますが、学生、教職員の協力によってさわやかな空気と緑につつまれた静かな学園生活を取り戻すことができました。

以上工学部の現況を述べましたが、日本大学の長い歴史の中で新生工学部がどのように創られどのように発展してきたかを知るしるべとして、近く完成される日本大学80年史と共に工学部30年史作製の準備がかわせ行なわれております。校友の方々の築き上げた伝統の上に立って更に発展させるべく私達は努力し続けて居ります。いままでの閉された大学から脱皮して、眼を世界に開き真に内容のある大学にしなければなりません。そのためにはまだまだ残された問題があります。履習課程をどのようにするかの問題、学生が外国に留学した場合の単位の取扱い、理工系3学部間の単位互換の問題等を一つ一つ解決して参ります。どうか校友の皆様方も私達の活躍の姿を見守り下さいまして、陰に陽に御支援下さいますようお願いいたします。

御 挨 拶

校友会長 太 田 雄 八 郎



全国津々浦々におられる校友諸兄姉には、それぞれの分野に於いて、御活躍されておりますことは、誠に喜びにたえない次第であります。

本年度の総会に於いて、校友諸兄の推挙により、一万有余名を有する校友会会長という重責をけがすこととなりましたが、もとより浅学非才でありますので、はたしてこの任にたえ得るかどうか疑問でなりません。しかし微力ではありますが、役員並びに校友諸兄の御支援のもとに、校友会の育成のため、その任をまっとうしたい所存でありますので、どうか御協力と御鞭撻をお願いいたします。

かえりみれば校友会は昭和33年5月に結成され、歴代の会長がいくたの苦難の道を歩みながら、数々の業績を残して今年で14年を迎え、学部と共に今日の校友会に育成発展をみましたことは、学部の御指導はもとより、校友諸兄並びに学生諸君の御協力の賜物であると深く感謝しているところであります。

今年度の目標として、次の事業を計画しております。

1. 支部の充実

東京・中京（名古屋を中心とした）両支部が結成さ

れてまもないので、本部と良く連絡をとりながら充実を計って行きたい。

2. 校友会館の移転

現在の校友会館は、学部整備計画によると使用出来なくなりますので、学部の配慮により、現在建築中の学生部室棟（仮称）の相当部分を会館並びに事務室として当年、移転、使用することになります。

尚、当部室棟は、現在の武道館の東隣り、旧大講堂の跡であります。

3. アカシヤ図書の供与

現在までのアカシヤ奨学金制度を廃止し、それに代るアカシヤ図書を学部へ供与することに総会に於いて決定しました。奨学金は10名の学生に給与していましたが、一人でも多くの学生諸君に学術研究の資料とすべく、図書を学部へ供与して大いに利用していただくのが目的であります。

今や我が国は公害戦争に悩まされており、これらの公害を一掃すべく若きエンジニア諸兄は、母校で学ばれた技術をいかんなく発揮され、公害撲滅になお一層努力していただきたいと思ひます。公害のない住みよい国造りに邁進して下さい。

最後に校友会の発展と共に校友諸兄姉の御活躍と御健康をお祈りいたします。

（筆者、土木工学科第3回卒業 郡山市役所土木課勤務）

昭和 47年度

第15回定期総会開催される

激動する世情の中で、母校・工学部が、日に日に新たな脱皮を経て、時代の求める人材を幾多、世に送り出しているのは、誠に心強い限りであります。

校友会も、工学部卒業以後の同窓生諸氏の窓口として大いに努力し、会員の親睦、並びに御活躍に、少なからず後見の任を果して参りました。

さて、工学部校友会の昭和47年度定期総会は、桜花爛漫の4月23日、染本ホテルに於て、会員多数の出席のもとに定刻より開催された。

会は、半沢副会長の開会の辞で始まり、武田会長の挨拶、次いで議長に関根昭一（電2回卒）、書記に小川敏彦（化14回卒）鈴木清司（機17回卒）の諸氏が選出され、直ちに議事に入った。会は、終始なごやかな中にも、鋭く活発な協議があり、今後の当会務運営に益するところ多大であった。議事の進行については以下の通りである。

第1号議案 昭和46年度会務報告 武藤事務局長

- あかしや奨学生決定
 - 工学部校友会東京支部支部長選出（古村和夫、土3回卒）
 - 中京支部結成会準備委員長選出（平野卓、土3回卒）
 - 校友会館移転について臨時総会（於、校友会館）
 - 下宿対策委員会
- 等の報告があり、承認された。

第2号議案 昭和46年度会計及び監査報告

- 決算報告（表1）に依り、太田副会長より説明があり、次いで、監査委員3名を代表し、諏佐達也（土1回卒）委員より監査報告がなされ承認された。

第3号議案 昭和47年度事業計画と予算の審議

- 学園整備計画の一端として、現在の校友会館は使用出来なくなる。このため学部では、校友会館を含んだ建物を建築して、一部を当会が使用することとし、移

転を計画。

- 事務職員の待遇改善。
- 図書購入資金供与（あかしや奨学資金に代って）。
- 宛名印刷機を購入し、事務の能率化を計る。
- 学部並びに、諸団体との協議事項が多いので、特に連絡協議会費を費目に加える。
- 校友会報を準会員（工学部在学学生）全員に配布する等の事業計画について、会長の説明があり、活発な質疑の後、昭和47年度予算（表2）は原案の通り可決された。

第4号議案 校友会々則一部改正の件

- 第4条・第3項、奨学金給与、を、図書供与に、
- 第11条に、正会員として、「日本大学大学院工学科



を修了した者」を加える。

- 第15条・8、日本大学評議員は、理事相当職とする以上の通り決定された。

第5号議案 昭和47年度役員選出

渡部幸夫（土1回卒）選考委員長、外各科1名、執行部1名、計7名の選考委員を決めて、役員を選出し、委員長の報告（表3）通り可決された。

以上の様に慎重な審議を重ね、太田副会長から閉会の辞があり、会は無事に終了した。

次いで、直ちに同会場に於て 工学部、全日大福島県支部、工学部父兄会より、多数の来賓を迎えて懇親会が開かれ、新しい話、古い話に時の経つのも忘れて、旧交を温め合った。



〔表1〕

昭和46年度歳入・歳出決算報告書

昭和47年3月31日現在

款項	種 目	予 算 額	決 算 額	比較増減
△印……減				
歳入の部				
会費	1 終 身 会 費	0	3,187,012	3,187,012
	2 入 会 金	0	3,855,012	3,855,012
繰越金	3 前年度繰越金	4,075,538	4,075,538	0
雑入	4 預 金 利 子	35,000	36,794	1,794
	5 雑 入	1,000	6,000	5,000
繰入金	6 基本財産より繰入	4,066,000	0	△4,066,000
合 計		8,171,538	11,160,356	2,988,818

歳出の部				
事業費	1 給 料 ・ 手 当	1,000,000	992,336	7,664
	2 保 険 料	100,000	98,332	1,668
	3 交 通 費	221,000	221,000	0
	4 旅 費	88,000	13,570	74,430
	5 交 際 費	200,000	179,840	20,160
	6 消 耗 品 費	50,000	37,366	12,634
	7 備 品 費	20,000	17,030	2,970
	8 印 刷 製 本 費	150,000	147,216	2,784
	9 通 信 運 搬 費	500,000	472,335	27,665
	10 修 繕 維 持 費	10,000	1,400	8,600
	11 光 熱 及 水 道 料	25,000	12,000	13,000
	12 雑 質	36,000	34,775	1,225
計		2,400,000	2,227,200	172,800

事業費	13 組 織 対 策 費	50,000	30,000	20,000
	14 会 報 発 行 費	289,000	203,830	85,170
	15 名 簿 作 成 費	81,000	81,000	0
	16 下 宿 幹 旋 費	10,000	5,320	4,680
	17 あかしや奨学金	240,000	240,000	0
	18 卒 業 祝 賀 会 費	300,000	291,782	8,218
	19 負 担 ・ 補 助 ・ 援 助 費	1,480,000	1,380,000	100,000
	20 募 費	100,000	83,220	16,780
	計	2,550,000	2,315,152	234,848
会議費	21 総 会 費	180,000	177,042	2,958
	22 役 員 会 費	550,000	542,818	7,182
	23 募 費	450,000	402,330	47,670
予備費	計	1,180,000	1,122,190	57,810
	24 予 備 費	41,538	35,000	6,538
積立金	計	41,538	35,000	6,538
	25 積 立 金	2,000,000	2,000,000	0
合 計		8,171,538	7,699,542	471,996

A 運用費		
歳入総額	11,160,356 円	
歳出総額	7,699,542 円	
差引残額	3,460,814 円	
B 基本財産		
昭和45年度からの繰越	9,924,992 円	
昭和46年度の利子	481,788 円	
運用費からの積立	2,000,000 円	
計	12,406,780 円	
C 繰越金		
A+B=3,460,814+12,406,780=15,867,594 円		

上記の通り報告いたします。

昭和47年3月31日

日本大学工学部校友会

会長 武田 仁 幸 ㊟

昭和47年4月8日監査の結果相違ありません。

監査 諏佐 達也 ㊟

同 高野 宗操 ㊟

同 菅野 宗和 ㊟

〔表2〕

昭和47年度予算書

款項	種 目	予 算 額	前年度予算額	増 減
----	-----	-------	--------	-----

△印……減

歳入の部

会費	1 終身会費	3,000	0	3,000
	2 入会金	3,000	0	3,000
繰越金	3 前年度繰越金	3,460,814	4,075,538	△614,724
雑入	4 預金利子	35,000	35,000	0
	5 雑入	1,000	1,000	0
繰入金	6 基本財産より繰入	5,700,000	4,060,000	1,640,000
合 計		9,202,814	8,171,538	1,031,276

歳出の部

事務費	1 給料手当	1,300,000	1,000,000	300,000
	2 保険料	130,000	100,000	30,000
	3 交通費	221,000	221,000	0
	4 旅費	100,000	88,000	12,000
	5 交際費	200,000	200,000	0
	6 消耗品費	50,000	50,000	0
	7 備品費	550,000	20,000	530,000
	8 印刷製本費	175,000	150,000	25,000
	9 通信運搬費	250,000	500,000	△250,000
	10 修繕維持費	10,000	10,000	0
	11 光熱及水道料	15,000	25,000	△10,000
	12 雑費	30,000	36,000	△6,000
計		3,031,000	2,400,000	631,000
事業費	13 組織対策費	100,000	50,000	50,000
	14 会報発行費	800,000	289,000	511,000
	15 名簿作成費	150,000	81,000	69,000
	16 下宿対策費	20,000	10,000	10,000
	17 図書購入援助費	300,000	240,000	60,000
	18 卒業祝賀会費	350,000	300,000	50,000
	19 負担・補助・援助費	850,000	1,480,000	△630,000
	20 旅費	200,000	100,000	100,000
計		2,770,000	2,550,000	220,000

会議費	21 総会費	200,000	180,000	20,000
	22 役員会費	250,000	550,000	△300,000
	23 連絡協議会費	300,000	0	300,000
	24 旅費	400,000	450,000	△50,000
計		1,150,000	1,180,000	△30,000
予備費	25 予備費	251,814	41,538	210,276
	計	251,814	41,538	210,276
積立金	26 積立金	2,000,000	2,000,000	0
	計	2,000,000	2,000,000	0
合 計		9,202,814	8,171,538	1,031,276

〔Ⅰ〕一般会計

歳入額 9,202,814 円

歳出額 9,202,814 円

差引残額なし

〔Ⅱ〕校友会館移転特別会計

	歳入 額		歳出 額		備 考
	種 目	予 算 額	予 算 額		
移転負担金	基本財産より繰入れ	3,000,000	3,000,000		昭和46年度臨時総会議決
移転準備金	同上	1,000,000	1,000,000		昭和47年度総会に提案
計		4,000,000	4,000,000		

歳入額 4,000,000 円

歳出額 4,000,000 円

差引残額なし

以上の通り提案いたします。

昭和47年4月23日

日本大学工学部校友会

会長 武田 仁 幸

[表3]

昭和 47 年 度 役 員

役 名	卒 業	氏 名	役 名	卒 業	氏 名
会 長	土木 3 回	太 田 雄 八 郎	評 議 員	土木 10 回	落 合 正 喜
副 会 長	化学 6 回	半 沢 忠 忠	全	土木 13 回	西 村 孝 孝
副 会 長	土木 8 回	武 藤 貞 泰	全	土木 17 回	大 内 幹 夫
事 務 局 長	機械 9 回	佐 藤 光 正	全	建築 7 回	小 栗 治 男
理 事 事 業 部 長	土木 3 回	松 山 光 克	全	建築 10 回	橋 本 寛
理 事 経 理 部 長	機械 4 回	水 田 守 守	全	建築 15 回	八 町 雅 康
理 事	土木 3 回	佐 藤 幸 助	全	建築 18 回	森 吉 美 世
全	電気 3 回	釣 巻 且 男	全	機械 10 回	野 口 英 世
全	化学 5 回	平 手 仁 仁	全	機械 13 回	小 野 沢 元 久
全	電気 9 回	高 久 田 稔	全	機械 13 回	斎 藤 清 夫
全	化学 14 回	小 川 敏 彦	全	機械 17 回	鈴 木 清 司
全	建築 14 回	宗 像 武 久	全	電気 2 回	関 根 昭 一
全	建築 15 回	馬 場 彦 吉	全	電気 4 回	山 岸 利 正
全	化学 15 回	小 林 義 美	全	電気 14 回	伊 藤 宣 世
本 部 評 議 員	機械 4 回	根 本 年 雄	全	化学 2 回	篠 崎 道 夫
監 査	建築 1 回	諏 佐 達 也	全	化学 13 回	五 十 嵐 昭 教
全	機械 2 回	菅 野 宗 和	全	化学 19 回	新 田 起 志 雄
全	化学 3 回	高 野 操	東 京 支 部 長	土木 3 回	古 村 和 夫
評 議 員	土木 9 回	藤 紫 朗	中 京 支 部 長	土木 3 回	平 野 卓

工学部校友会東京支部だより

校 友 佐 藤 幸 助

昭和46年12月18日東京支部第1回役員会開催される。
4月に設立し、役員も仮評議員だけでスタートして今
回の役員会を行なった。尚、懸案事項の支部長には、

古村和夫 土木第3回卒 古村建設代表取締役
を選出した。又、仮評議員を自動的に評議員に移行し、
此の役員だけで会の運営をする様に決定した。

工学部校友会東京支部千葉分会結成する

校 友 佐 藤 幸 助

新緑が萌える陽春の4月27日、京葉臨海工業として
発展著しい100万都市千葉に於いて校友の親睦と友愛
を尚一そう高めるため、東京支部千葉分会を結成しま
した。

鈴木照四止氏(土木2回浅野工事)千葉営業所々長
を幹事として、千葉市内天ぶら徳川にて開催する。終
始学生時代の昔話に花を咲かせ、楽しい一夜の集いを
過しました。尚今後はその都度、会をもち宴にレクリ
ェーションにその機会をもつ様取決める。

千葉分会の役員(仮)及び会の場所下記の通り

会長 鈴木照四止 土木第2回卒 浅野工事株式会
社千葉営業所々長

評議員は次の通り

根本亮 土木第3回卒 千葉県土木部河川課課長補

佐

安部京也 土木第3回卒 千葉県開発庁港工局建設
2課々長補佐

赤羽弥 土木第4回卒 旭建設株式会社工事部長

石井一栄 土木第4回卒 大洋開発株式会社代表取
締役

加藤育男 土木第4回卒 加藤組社長

葉山信利 土木第6回卒 千葉県土木部河川課係長

千葉県在住で会について連絡ご希望の方は

浅野工事株式会社千葉営業所 鈴木照四止氏

TEL ()迄お知らせ下さ

い。(筆者 土木工学科第3回卒業 本会理事

三井造船勤務)

海外視察記

オランダの主都

デン・ハーグ市

建築学科助教授

足立和夫



去年8月11日、羽田空港を出発してから、約3ヶ月の日程で、欧州、米国の主要都市40都市を見て歩きました。

今回はオランダの主都デン・ハーグ市を紹介したいと思います。日本を離れて約1ヶ月後、イギリス、スペイン、フランス、スイス、ドイツ、

オーストリア、イタリアと廻り、再びローマから国際列車にて北上、パリー、ベルギー、オランダと各国の主要都市を視察しました。ロンドンを除いては、天候にもめぐまれ、予定通りの旅行を続けることができました。フランスからベルギー、オランダへとくると緑も豊かになり、日本の風景にも似てきます。

イタリアは、数年来の早ばつにみまわれたといわれておりましたが、オランダの車窓から見る景色は、広々とした牧場や畠が続き、気分的にも、のんびりとした感じでした。

ハーグ市は、国際空港などで、全世界に広く知られているアムステルダムから車で40分の所にある政治の中心都市です。9月8日夕、

到着。駅前近くのホテルに宿泊しました。毎日晴天続きでしたが、朝晩は寒く、町では毛皮のオーバーを着ている人も見受けられる程でした。（日中華氏22度前後）

当市は、もともと人口は約70万人ありましたが、現在（1971年）では、約54万人に減少しております。この理由の一つとして、旧市内のごく一部が戦災に会いましたが、ほとんど古い建物が残っております。これらの建物を維持する為には、使用人や女中を置かなければ難しいのですが、現在では、このような使用人を求めることも難しいため、金持は、郊外の住宅（フラット・ハウス）へ移転しつつあります。そこで中心街の売家が目立ってきております。もともとヨーロッパの都市は、都市といっても日本でいう一集落を意味しており、日本の場合のように市町村合併は行われません。オランダでは人口2,000人程度の集落が建設されれば、市長が選ばれるため、最大の都市



アムステルダム（人口86万人）の外、数都市を除いて、2,000人から10万人位の都市が、約900市もあります。

住宅政策としては、低賃金労働者のためのアパートが建設されております。1戸の大きさは、日本の住宅公団の2～3DKより規模も大きく、1室12乃至13帖敷き位のリビング・ルームに、寝室が2乃至3室、それに台所、浴室付です。そして家賃は月額1万円以下におさえられております。労働賃金は週給で支払われますが、月額に換算すれば（以下同様）次のようになります。

1 家族 男子25才以上の労働者で、配偶者及び16才以下の子供2人までの月収。

月給（総額）	102,400円
差引かれる金額は	
社会保険外	17,200円
税金	6,400円
差引手取合計	78,800円

最低賃金は1971年7月現在、77,090円でおさえられており、大学卒初任給は、7～8万円です。しかし生活水準は、日本の約2倍近くになっております。しかし、民間の不動産会社が建設しているアパートは、家賃が2～3万円もするので、中産階級でなくては住めません。市の中心街に住む日本人の住宅について尋ねたところ、建物は3階建、家具は付かず、カーテン、ジュエタンのみで、室は9寝室、居間、食堂、台所、便所付浴室で月額13万円の家賃と聞いておどろきました。ヨーロッパ諸国では、家賃といえば、家具付が一般的となっております。家賃については家賃統制法があり、無法な家賃は請求できないことになっているのですが、外国人に対しては、法目をくぐり、高めに要求するのだそうです。

ハーグ市は、第2次世界大戦に、ドイツ軍に空襲され、さらにロケット発射基地として使われましたが、歴史的な建造物や住宅の大半は残され、戦災箇所も、外観は旧建物に似て復旧されております。

道路は広く、市電、バスが通り、歩道は巾6m位もあります。そして十字路にある広場には記念の銅像や花がかざられたり、噴水の出ている池が作られております。

戦後、各国で道路の拡張が行われましたが、オランダも例外ではありません。ヨーロッパでは、日本と異なり、土地の値段というものがなく、全て土地付建物

で売買されますので、市の道路の拡巾に対しても、住民は、余り反対せず、どうしても立ち退かない場合には、土地収用法が適用されるそうです。

オランダの道路事情はすばらしいものですが、道路の建設は、さらに進められているのも、オランダに限らずヨーロッパ各国とも同じ状態です。これは大国あるいは小国が、地理的に陸続きであり、EEC諸国としての経済共同体として、お互に競争意識も加わり隣国の高速道路に接続する道路を作らなければ、それだけ経済的な損失もあることに原因しているそうです。

これに較べると、イギリス、アイルランド、スペイン、ポルトガルなどは、地理的条件も加味され、遅れているといわれております。

人口密度世界第1のオランダは、国土のほとんどが平地であって、日本のように約80%も山岳地帯があるのとは異なり、国土は広々として、人の姿もまばらで、どこが、人口密度が高いのか疑いたくなる程でした。

国際列車の車窓からは、広々とした牧場や畠が続く森が過ぎて人家が見えてくると、都市の中へ入ってくるわけです。牧場には、他の国では余り見られない程水も豊富で、牧草も青々と繁り、たくさんの牛が放牧されております。さすがにチーズの国だとうなずけます。

食物は、ヨーロッパ随一とか、マーケットの肉屋、魚屋、野菜兼果物屋など品種も豊富ですが、日本にはおよばないようです。ウナギが生きたまま売ってありました。オランダ人が、カバ焼を食べるわけもなく、更に、ウナギの乾物もありましたが、どう料理して食べるのか不思議に思いました。

ヨーロッパ各国と同様、オランダにも米国のコカ・コーラ、タバコ、或いは日本製写真機（コニカのミノルター）、トランジスターラジオ、テープ・レコーダーなどが多量に輸入されております。これは別に、オランダの技術が、特に遅れているというのではなく、もともと資源の少ない国として、資源の豊富なものを輸出し、必要なものを輸入する建前をとっているわけです。この点は日本の現状と比較して、興味深く感じました。

国民性は、至って勤勉で、諸国に囲まれた国（面積は日本の九州位）として、一応軍備も持っております。

社会福祉対策としては、老人ホームなどを国が建設しているわけですが、水準としては、スウェーデン並み

だそうです。（スウェーデンは後日訪問）戦前は、老人も多く退職年金で生活も一応できましたが、現在ではなかなかむずかしいようです。

国から出される老令年金

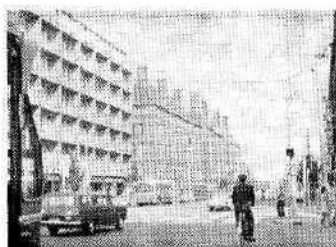
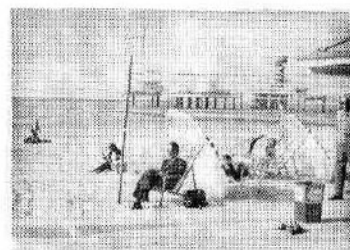
● 男子独身	年間	40万円
● 夫婦2人	"	57万円
● 未亡人	"	40万円

この外、夏中休暇手当として、さらに3~4%の金額が支給されます。この金額では、とうてい生活ができないので大半の人々は、個人的年金制度を加えて、生活しております。因みに老人の平均年令をみると、男性71.1才、女性75.9才と日本より大分長生きする人達が多いようです。

ハーグの市内をバス、あるいは市電に乗って行きますと、菩提樹や柳の街路樹、水鳥の遊んでいる小川、運河あるいは公園が目立ちます。市の面積の27%は緑地帯で、市民1人当たり30㎡にも当り、まことにうらやましい都市景観でした。

市の中心から市電で、約15分はなれたスケフェニンゲンと呼ばれる海水浴場へ行ってみました。この北海の浜辺の砂は、白砂で細かく、砂浜の上では、若い人達が海水浴、ハンドボールあるいは日光浴を楽しんでおりました。風もおだやかで、北海の波も静かに打ち寄せておりました。スケフェニンゲンは沖に建設された海上レストラン、海辺の近くにある宿泊施設、いろいろな遊技施設と共に、海水浴場としてヨーロッパにおいて有名な場所の一つとなっております。私が訪れた時期は、ヨーロッパのパカンスも過ぎたときで、最盛期の混雑ぶりもわかりませんが、とにかくすばらしい海辺でした。

又、ゴルフの発祥地としても知られ、市内には数ヶ所ゴルフ場があります。平日にゴルフを行なうのは外人に多く、オランダ人は平日には行



かないそうです。

市内の建物は古く日本でいう下駄ばき公団住宅という所で1階が商店や事務所、2階以上が住宅となっております。全て中庭式の建物で

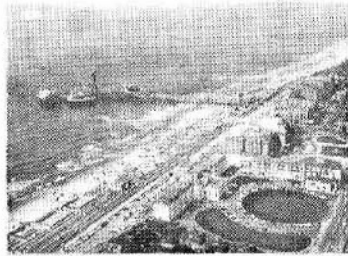
浴室、台所は中庭に面して作られ、道路側は居室として、一様に作られております。

屋根は赤瓦、壁は主としてレンガ色、窓枠は白ペンキ、これがハーグ市中心街の町の景色です。

市の中心をはなれるとアパート群が（4～5階）目立ち、近代的な感じも致しますが、旧市内の建物の場合、再築する場合にも、古い都市景観を保存する意味で、外観については、いろいろ規制が行なわれているそうです。ヨーロッパ諸国と同じくオランダ人も、住宅、特に家具を大事に致します。そこで国民は住・衣・食の順に家計のやりくりをしているわけです。

日本人が、衣・食・住にお金を使うのと対象的な感じがします。それゆえに中央駅、デパートなどの公共建物も余り目立たず、お粗末に見えるのもうなずけます。

さらに日本の場合サラリーマンが一戸建（庭付）の持家を建築するのは自由ですが、オランダでは、一戸建持家住宅には、いろいろと規制があり、規模や資材の面で制限を受けております。私権の制限についても、我々日本人として、改めて考えてみる必要を感じます。



いろいろとまとまりのないことを、思いついた順序に書いてみました。私の1人旅は、2～3日位で国境を越え、国が変わると貨幣価値・言語・国民感情が変わり、一日の生活に馴れるのに、まことに疲れます。更に当時のドル・ショックは、旅費の20%近くも節約をよぎなくしました。そして特に不自由したのはホテル探し、手荷物の運搬、食事に何を食べるか（ヨーロッパ人は、肉とジャガイモを多量に取る）にありました。気候風土が海洋性気候で、空気が乾燥しているせいか、日本人にとっては、ヨーロッパ人よりも、水分を余計に要求するのでしょう。ビールを昼夜何回か飲みました。ビールは、大体飲料水（瓶入り）と同じ位の値段で売られていたのも懐かしい思い出です。

このあと、ロッテルダム、アムステルダムを経て、ドイツ、デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、米国と長い旅が続きました。最後に、私としては初めての海外出張であり、色々の面での苦勞がありましたが、外国からみた日本というものが、どんなものかを考えさせて貰った事は、大変大きな収穫の一つでした。

（筆者 日本大学工学部建築学科助教授）

～続・下記校友の消息をご存じありませんか～

昭和46年12月発行の校友会報第20号に、第1回卒業から第13回卒業までの、消息不明者を掲載しましたところ、たくさんの校友から調査の上お知らせ下さいまして誠にありがとうございました。本号を借りて事務局より厚くお礼を申し上げます。

引き続いて今回は、第14回卒業以降の分について前号同様に下記の通り、掲載しましたのでご協力を賜わりたく重ねてお願い申し上げます。

〔土木〕 14回	佐々木洋志	松田 剛	小池 安郎
細田 斉	成瀬和郎	鈴木 武	〔建築〕 14回
北村武司	磯部博司	朝長尚重	内藤章吾
新田経年	浜村栄克	丸浦 誠	村井昭夫
山岡良樹	井上喜夫	帯谷敏昭	大塚正章
合田秀夫	岡村利光	吉田忠彦	伊藤初幸
14回	荒木 忠	加藤 彰	富樫宏明
宮崎克彦	吉岡和彦	吉永克己	黒河内将行
岡田輝久	〔電気〕 14回	長谷部祐弘	米屋洋一郎
渡辺一雄	宗 昌孝	若林孝勝	坂本永一
山下富士雄	〔工化〕 14回	樹下高明	白方英昭
島崎正利	広瀬保祐	堀 泰純	増田幸男
金子 武	山田恵三	丹羽尚昭	〔土木〕 15回
阿部一晴	佐藤卓治	高橋 豊	鍋倉武敏
堀田 昌	山崎 武	石井一夫	竹尾 純
〔建築〕 15回	石田詔一	上地 守	長田雅夫
加藤武彦	工藤 護	佐藤正信	高林武夫
中村俊秀	〔機械〕 15回	及川茂樹	金堀克彦

勝原徳文	柴崎俊夫	田山国男	高山輝美	福本徹也
戸次雄一郎	安原幸彦	桑原俊彦	佐藤泰一	千葉忠勝
渡辺勝昭	田村紘一	〔電気〕	15回	荒井四郎
加藤勝昭	高橋 潔	中沢和宏	深町哲久	原山恵八郎
安井正彦	竹尾 誠	藤本遵治	〔工化〕	15回
土居猛雄	柴田一宏	鈴木成夫	岩本 忠	〔土木〕
16回	鷹鷲義哲	松山直己	了道修身	佐藤佳幸
伊藤勝成	〔建築〕	16回	近藤保彦	原口敏春
宮崎義昭	村井 淳	影山俱典	近藤洋二郎	〔機械〕
16回	柿原克彦	丸山洋一郎	和久田恵一	〔電気〕
16回	北条嘉久	稲田恭一	村松由春	〔工化〕
16回	玉田靖治	〔土木〕	17回	青柳茂敏
杉山厚則	藤林義廣	〔建築〕	17回	鈴木智子
藤田吉之	宮崎 毅	〔機械〕	17回	小栗純吉
児玉雅彦	野瀬良幸	緒方範夫	三島千城	銭谷 肇
平塚和雄	〔電気〕	17回	村島昭男	〔土木〕
18回	砥綿啓一	〔建築〕	18回	築山雅俊
〔電気〕	18回	古賀久勝	〔工化〕	18回
国分秀夫	浅井正男	〔土木〕	19回	高橋慎市
矢野光一	吉井英治	〔建築〕	19回	藤本則生
柴田 仁	川上和憲	門間敏昭	〔機械〕	19回
伊藤誠一	横田正実	〔電気〕	19回	大塚吉高
小林 隆	〔工化〕	19回	生駒 潔	加藤義昭
中野克見	〔建築〕	20回	山元正樹	〔電気〕
20回	佐藤道夫			

校 友 の 声

雑



早いものです。私が千葉県に昭和30年以来奉職して、満17年を数えるようになりました。17年間務めて来た事を感じるまゝ記してみたいと思います。忙しいあい間をぬっての原稿ですので、只、紙面を汚すことばかりと相成りましょうが、どうぞお許し

下さい。又官庁の枠の中での考えでありますので別の考え方等充分あるかと存じますがご容赦願います。先づ、私共が卒業する時期は、丁度朝鮮戦争が終り特需景気も後退し、非常な不景気の時代であった。又現任のように技術者が引張りダコでもなく、民間会社から田舎の学部などに求人申込がないきびしい時期であった。私は官庁一本槍にしぼっていたところ、運良く六級職の試験に合格し、千葉県庁にお世話になる事が出来た。私の入った千葉県でも、現在は毎年100名以上の大学卒技術者を求めているが、その時分は28年卒の人が一人おり、あとは年輩の人々であり、大学卒は課長以下東大、京大等、私立出は河港課に私が一人のみであった。当然学校出と、現場からたゞきあげた人達の反目があり、私ら新入生はなにかにつけしばらくとまどいせざるを得なかった。技術的に、又は計算的にむづかしいものは、ほとんど学校出がイニシヤチブをとり進めていた。民間も同じであろうが、むづかしい計画は本庁で進め実施の段階になって、出先機関に執行させるというシステムをとっていた。私もこのようななかに入り、ひさしぶりの新規採用生であったため、計画策定のとき「おい新入生！現役の頭で良いアイデアはないか」とか、構造物等の安定計算をやらされた。一番最初に指名される訳であり、むづかしい計算、大学でお目にかゝらなかった問題にぶつかるとう技術者になったよろこびよりも、悲しみが出るしまつであった。独身寮に帰った後も、事務系の人などマージャン卓をかこみ、喜々と遊んでいるのをみながら、水理学や応用力学に頭をいためている自分であった。ある時など数学的にどうしても解らないところがあり、東京に就職していた現化学教室の高野君のところへ教わりに行く事も再三であった。このような計画策定の仕事は、30年から34年まで従事し、現場事務所に転出した訳ですが、今考えますに、諸先輩のおかげで苦労はしたが非常に幸せだったと考えております。その後、本庁と現場事務所を出たり入ったりで、一昨年の4月に又、河川課の現職についております。この間千葉県には、私と同期の安部、杉原両君、後輩で私の直属の係長の葉山君（33年卒）、道路建設課の橋梁

感

校 友 根 本 亮

係長をやっている蛭川君（36年卒）等々が入って来て、互いにはげまし合いながら仕事を進めております。ここで、最近の地方公務員の姿なりを若干御紹介いたしますと、本庁では大規模プロジェクトの計画策定、対外交渉、予算化、各出先事務の統括をを行い、現場事務所はこれらの仕事の実施を受持っているのですが、毎年増加一途の公共事業費、これらの計画又は用地買収の困難性、住民パワー（住民エゴイズムも若干あると思われるが）等々のために、とにかく忙しすぎるという事がいえましよう。昔は、ジャーナリズム等にいわしむれば、官庁役人に対して、“休まず”、“おくれず”、“仕事せず”等の悪口をいわれておりますが、最近の開発に伴う諸問題の解決、住民の行政に対する参画、悪くいうなれば住民パワー等々により、土木工学の範疇のみではイエス、ノー、といえないような問題も多々出ております。数年前では、起業者の計画（主に技術的なサイドで最良と思われる計画）を金科玉条として、住民におし進めて来たのですが、最近ではこのようなやり方では、絶対に納得いたしません。あくまでも計画時点で住民の意志が反映するようなものでなくては承知しないのです。例えば道路1本通すにしても、ペーパープランのうちから住民に知らせ、納得させ、それから細部測量、設計に入っていくというのが現状です。私が現場事務所でもまだこのような設計をしていた現役？の頃には、住民の協力というものは大変なものでありました。用地買収の調印などにも公共事業といえは、積極的に協力していた事、最後の調印の時など、自分達の補償金の中から、酒を用意し、私共にご馳走をしてくれるようなムードでありました。又親身になって移転先などを心配してやった時は、のちのちまでほんとに感謝されたものでありましたが、最近住民の目ざめというか、エゴイズムもあらうかと思われませんが自分達で陳情をした道路であっても、河川改修であっても、一応は反対をとなくては出発というのが千葉辺りの現状です。このようなことから、持術者として、新しい技術の勉強もさることながら、以上に記したような問題でなやまされております。今後は、土木技術者も土木工学を習得する事は論をまたないが、これからは一つの事業をすゝめる上で、社会学、哲学を入れた計画でなければ現代の住民は納得しないであらましよう。現在、勉学にいそしんでいる後輩の諸君も、このような時代の流れをくんでいただき、広い視野をもって技術を学んで優秀な技術者となられん事を祈っております。「おわり」

（筆者 土木工学科第3回卒業

千葉県庁土木部河川課課長補佐）

校友団結の社会的地位

校 友 石 井 一 栄

時代の移り変りの急変・進歩の著しき今日の日本に於いて、校友の目ざましい活躍には目をみはるものがあります。それは偏に校友各自身の努力と、団結相互扶助の精神のなにもものでもないと思われまゝ。各大学の校友の方々でも日大工学部校友は、先輩後輩の関係がうらやましいといわれて居ります。

校友の中にも官庁・民間・自営と種々の分野に進まれて居られる方々がありますが、その立場、立場を通してお互いに助け合い、又それぞれの立場を良く理解し傷つけぬ様配慮を払うという広い一人一人の心が周辺の皆様方から、うらやましく考る点でないかと考えられます。

我々工学部校友には、都会に於ける大学生の殺伐とした人心とは異った立派な社会人に成長させる何ものかがあります。あのアカシヤ並木につつまれた自然環

境、豊かな母校を通じ、各教授陣もその伝統育成に努められていることと考えます。数多い校友の中でも第一線でめざましい活躍をされている方々をみますに、殆んどといって良い程これらの精神をつちかった方々です。これらの諸兄の皆様は団結し横の結びつきを広められ、大きく社会人として貢献されて居ります。

校友の皆様も、この世界に誇る日本大学のチームワークにより、より良き社会の一員として、個人の幸を掴むべきではないかと考えます。

ここに校友の皆様が目ざましき成長の裏には、上記の様な力もひそんでおり、大きく皆様の繁栄を支えておることを感じ記させて頂きました。

(筆者は土木工学科第4回卒業)

太洋開発株式会社経営)

雑

感

校 友 高 松 洋



学窓を去ってから早や4年目を迎えました。私の会社は北海道の工業地帯である室蘭に所在するセメント会社です。隣接して新日鉄や日本製鋼所、日本石油等が立並び、日本有数の工業地帯といえるでしょう。私の勤務する会社は、従来富士製鉄の系列にありまし

たが、新日鉄発足と同時に社名も富士セメントから日鐵セメントと改名されました。私は機械の整備部門に所属し、その主たる職務は建設工事の監督業務です。機械の据付工事は基より、鉄骨工事、土木工事と幅広い工事内容です。

入社1年目にしてボールミルの据付工事の監督に任命され、機械の据付等大いに学ぶべきところがありました。セメント企業は小野田、日本、住友の大手を柱に16社程有り、その製造過程は昔からあまり大きな変遷はないようです。セメント設備の主要であるキルンにしても、従来の湿式キルンから乾式キルンに移りかわったもののその根源は変化ありません。セメントを最終工程にて粉砕するボールミルにしてもツイン・ドライブ方式からセンタードライブ方式に移りかわり

つつもミル内でボールが回転し、原料を粉砕するのは昔も今も大して変わりありません。唯、そこには品質の向上と、コンピューターの導入による集中制御、コスト・ダウン等は随分と進歩したといえるでしょう。セメント企業各社の悩みは、生産過剰によるセメント売値の低下です。北海道内だけでも、当社を合わせて5社が入り混り、価格を下げ合って販売競争を行なっています。又、セメントの2次製品、すなわち新製品の開発が他社同様、私の会社でも進められています。研究開発のプロジェクトチームを作り、道路コンクリート盤や耐火建材、プレハブ材等の研究が進められています。我々機械技術に従事する者にとって一番の悩みは、セメント設備の主要機械はほとんどが高熱温と摩耗により寿命が短いという事です。特殊鋼の開発により、従来よりは良くなったといってもメリットを考慮して適用する材料はまだ未開発の要素を残しています。

基幹産業である鉄鋼セメント企業の今後は、けっして楽観的ではありません。これからは量より質への転換を余儀なくされているのです。

(筆者 機械工学科第16回卒業)

日鐵セメント勤務)

修士課程を終えて

校 友 今 村 仙 治



本学に大学院修士課程が新設されると同時に、第1期生として機械工学を専攻しました。私の専門分野は金属材料の塑性学の中の双晶変形についての研究で、今までは巨視的な変形しか扱ったことはありませんでした。ですから全くの未知の世界に入った訳で

あります。その動機となったのは、金属材料の弾性、塑性を主体とした強度と破壊の現象を解析するためには、どうしてもその内部の微視的な原子の変化について根本から追求してゆかなければならない必要性を感じたからであります。

この二年間、広川教授の下で実験者としての態度、考え方その他数多くの事柄について御指導を受け本当に貴重な体験であったと思っております。

他大学の大学院と異なっていることは、本学の場合は新設されたばかりなので、先輩の残した業績が全くないことですが、何事も最初は苦労することは当然で

あり、これで諦めることは研究を放棄することになります。大学時代に於いては実験装置、試料等がすでに提供され、あとは装置を操作するだけでデータが得られたことがしばしばありましたが、実際は他人が行っていない実験をする時には、手製の付属品又は装置を作ることが必要になってきます。機械的な知識は当然のこと電氣的、化学的な知識も要求され自分の不勉強さを感じる時もありました。今、振り返ってみますと苦しいこともありましたが、過ぎ去ってしまうと皆良い思い出として残っております。

常に一生懸命頑張れば、その結果も次第に良い方向へと進みます。毎日少しでも絶え間ない努力を行うとついには大きな成果をもたらすということが分かりました。これからも自分の歩調で、自分の道を歩いて行こうと思っております。諸先生方の御指導、御協力を得まして修士課程を修了することが出来ました。心から御礼を申し上げますと共に、今後は本学発展のため頑張りたいと思っております。

(筆者 機械工学科第17回

大学院工学研究科第1回卒業 日本大学工学部勤務)

事務局だより

〔人事〕このたび速藤明美さんは、昭和45年2月1日就職以来、終始熱心に校友会事務局の仕事に果して参りましたが、一身上の都合により、本年五月末日付で依頼退職致しました。

尚、後任には、六月一日付で速藤恵子さんを決定しました。

事務局からのお願い

1. 転勤・住所変更・改姓などの場合は、その都度なるべく早く校友会事務局にご連絡下さい。
2. 校友会報原稿募集 ～ 校友会報は年2回発行する計画ですから、卒業生・学生に知らせたい内容でしたら大歓迎します。どうぞ原稿をお寄せ下さい。
3. 終身会費未納の方はお納めねがいます。
昭和45年度第19回までの卒業生は2,000円です。
昭和46年度第20回以後の卒業生は3,000円です。

事務室の窓口から

近ごろは、下宿する人数の割合に対して、下宿業者の数が多く、業者諸氏は、営業上、下宿人の獲得に躍起！下宿人紹介を兼ねる当事務局は、新学期ともなると、あの手の手の攻勢に汗だく。

但し、係の者一同、決して不公平な事務取扱へは致しません。曰く「ワイシャツは汚しても、校友会の面目と意気は汚す訳には参りません」と。清潔公平な処置をもって、下宿紹介の事業をすすめていきます。

昔の、下宿生諸氏には、うれしいニュースですね。

～ 町の電気屋で ～

当節、何が売れるかって？、それはあなた、古いテレビに古い冷蔵庫に、古い洗濯機ですよ！

「??? ……」。

「で、どんな人が買うんですか？」 ……

「ナーニ、みんな日大生ですよ」。

サースガー、工学部だけのことはある。